

## きみはいい子（4）

児童虐待は、物理的な暴力、言葉による暴力、ネグレクトなど、様々な形を取って現われます。また、その背景も、児童虐待のケースごとに皆違うといった方が良いでしょう。

子どもは親を求めています。特別の事ではありません。親の愛情を、その肌で確かめたいと思っているだけです。ただそっと手を伸ばしてやりさえすれば、その子供たちの切ないほどの思いに応えてあげることが出来るのに。そうすれば、子供はその手を掴み、親の愛情を感じ取ることが出来るのに、その簡単なことさえ出来ない親がいます。

その距離の遠さに、子ども達は絶望してしまいます。「自分が悪い子だから」と。親は現状から逃避することができても、子ども一人の力では、親から逃れて生きるすべはありません。

「うばすて山」という作品は、主人公である私と痴ほう症にかかり何もわからなくなっている母との葛藤を描いています。

主人公である私の母は、私が子どもの頃、言葉では表せない程のひどい仕打ちをしたのだけれど、今は痴ほう症のために何もかもわからなくなっています。勿論私は、母から受けた仕打ちを忘れたことはありませんし、今も恨んでいます。普段は、妹が母の世話をしているのだけれど、事情があって数日間だけ預かることになります。その数日間、母と生活する中で、昔の記憶がよみがえって来ます。

「みちこちゃんのおかあさんは、おかあさんと呼んだら、わらってふりかえってくれるんだ。うらやましくてたまらなかった。家に帰ると、おかあさんは、台所で大根を切っていた。わたしは、そっとうしろに近づいて、声をかけてみた。

「おかあさん。」

おかあさんは返事もせずに、勢いよくふりかえった。わたしは思わず後ずさった。「なによ。」おかあさんの顔は怒っていた。

おかあさんは、「用もないのに呼ばないでちょうだい。こっちは忙しいんだから」と怒鳴った。」

そこで、主人公の私はこう考えます。

「そうだ、みわちゃんのおかあさんは、庭でタオルを取り込んでいて、おかあさんは、

台所で大根を切っていた。違うことをしていたから、反応が違ったんだ。」  
子どもって、こんな風に考えるのですね。どこまでも、母親の方に気持ちを寄せていく。読んでいて切なくなります。

そうして、主人公の私は、おかあさんが洗濯物を取りこんでいるときに、もう一度呼んでみます。しかし、結果は同じでした。おかあさんはふりかえるなり、「うるさい」と怒鳴ったのです。

主人公の私は思います。「はあいって、言ってほしかっただけなのに。ふりかえって、わらってほしかっただけなのに。」

こどもの願いはおかあさんの笑顔。でも、母親の心が閉ざされていれば、そのささやかな願いさえ届くことはありません。

「おかあさんはおかあさんであって、みちこちゃんのおかあさんとは違うことに、わたしは気づけなかった。それから何度も何度も裏切られて、今は知っている。おかあさんはおかあさんだということを。」

それでも、主人公の私は、おかあさんが嫌いな自分は悪い子だという思いから逃れることもできずにいます。そんな私を救ってくれたのは学校の先生で、「ひどい事をする人を好きになる必要はない」といわれ、「おかあさんをきれいな自分をきれいな必要がない」事を知ります。

最後にこういうシーンが出てきます。雨のそぼ降る公園で、子どもの頃は決して繋いでくれなかった母の手を繋ぎながら揺れるブランコを見ていた時、風が吹いて私の目に砂が入ります。痛くて仕方ありません。その時、おかあさんが痛くて閉じようとしている私の目を無理に指で広げ、私の目を舌でぺろんと舐めます。わたしは目を開きますが、もうどこも痛くありません。

約束の日が来て、おかあさんを妹のところに連れて帰ることになります。それは、私にとって母を捨てることでもあるのですが、でも、最後に母が自分にしてくれた事は絶対に忘れまいと思うのです。

どんなに憎しみが深くて、母と子の邂逅の深さを感じずにはおられません。

(塾頭 吉田 洋一)